

夏期特別展 「農家の四季」



1997年

会期：7月19日(土)～8月31日(日)

わたしたちが毎日元気でいられるのもお百姓さんのおかげ。だれも農業と無関係に生きることはできません。今回の展示は、機械化される以前、すべてを手作業と牛馬の力で行なっていた頃の農業がテーマです。当時の暮らしを支えた懐かしの農具を特別展示室いっぱい展示します。どんな作業にどういう使い方をしたのか、同じような農具でも微妙な違いがあるのはなぜか、ぜひ、じっくりご覧ください。

展示資料は、稲作用具をはじめ、畑作用具、脱穀選別用具、運搬具、藁加工用具、野良着、農作業写真パネルなどに加え、農耕儀礼など農事に関わる信仰関係の実物資料や写真パネルなどで、総数300点あまりにものぼります。この機会に、農家に受け継がれている伝統的な暮らしへの理解を深めていただければ幸いです。

記念行事

講演会

「稲作と畑作の農耕文化」

水田稲作を中心にする平塚市と畑作および養蚕が農業の中心だった相模原市とは、同じ神奈川県内でも農業の形態が異なります。両市の比較を通して、稲作地域、畑作地域それぞれが持つ農耕文化の特徴について考えます。

日時：8月10日(日)午後1時30分～3時30分

講師：加藤隆志氏(相模原市立博物館学芸員)

会場：博物館講堂

参加：自由

体験学習「わらじを作って大山参り」

実際に自分の手で編んだわらじを履いて、盆山中の大山へ参拝します。

「ワラジ作り」

日時：8月9日(土)午前9時30分～午後4時

場所：博物館科学教室

「大山参り」

茶湯寺や大山寺など大山参道の史跡を見学し、わらじを履いて女坂を登り、下社で解散予定です。

日時：8月16日(土)午前8時30分～午後3時

場所：子易～大山阿夫利神社下社

*定員：30名(2回とも参加できる方に限ります)

*申し込み：往復はがきに住所、氏名、年齢、電話番号を記入し、博物館「大山参り」係へ

*切：7月25日(金)

農耕儀礼と作神

人間の力が及ばないとき、あるいは何か危機に直面したとき、人はおのずと心の中のカミに祈ります。このときのカミは具体的な姿を伴う神かもしれませんが、あるいは抽象的な存在かもしれません。あるいは死んだおじいちゃんかもしれません。現代を生きる私たちだって常に心の中のカミに問いかけながら物事を決断したり、ご加護を求めたりしているのですから、科学が十分に発達していなかった頃、しかも自然相手ゆえ作物の出来具合は天候によって左右される農業は、カミの力を頼らずにはいられなかったといえるでしょう。

作物の無事成長を祈願したり、豊作を感謝する気持ちが儀礼となって今日に伝わっているのが農耕儀礼と呼ばれるものです。この農耕儀礼を通して田畑のカミについて整理してみましょう。

正月に迎えるカミは年神といわれます。臼と杵や鍬などの主要な農具には一文飾りがつけられます。農具に年神を宿し、新たな霊力を備えさせようとする気持ちが込められていると思います。

四日のウナイ初めは田畑へ行って、オソナエと一文飾りを供えて豊作を祈願します。これも田畑へ年神を迎える行事と解釈できるでしょう。

小正月には藪玉、ケズリカケ、粟穂などいずれも作物が稔る様を象った予祝儀礼が行われます。このうち、ケズリカケは屋内外の神々に供えたのちセエトバライや初午でお焚きあげしますが、年神に供えたケズリカケだけは神棚にずっとあげておき、春になって種籾を蒔き終えた日に苗代の水口に立て、焼き米とともに供えます。ケズリカケには大山や氏神社のお札を挿しました。

田植えに際して取った苗を束ねる藁は、ネエバといって特別に選りすぐった藁を使い、神聖視されました。ネエバには年神棚に飾ったクミダレと呼ぶお飾りをほぐして混ぜると縁起がよいといわれ、田植えまでとっておく家もありました。苗代の播種祝いのケズリカケと、このクミダレのネエバは、いずれも年神を田に降臨させ、稲の生育を見守ってもらう意味があるといえます。

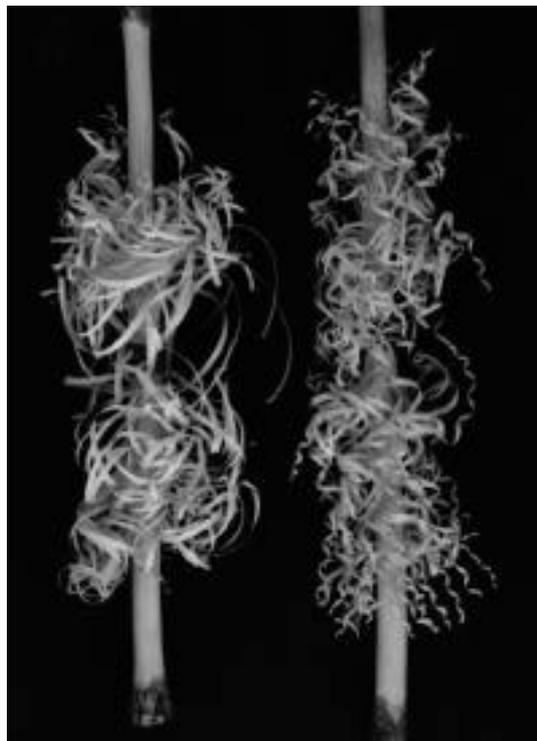
田の神節供と呼ばれる秋の行事があります。名称からは稲作儀礼のようですが、内容は大根の成長を祝う畑作儀礼の意味合いの濃い行事です。むしろ、平塚で田の神的な存在として拠り所にされた神の筆頭には、まず年神が挙げられます。

田植え終了の祝いであるウエアゲには、荒神に苗を供えます。荒神にはまた、稲刈り祝いのカリアゲのときに鎌を供えます。荒神は台所の火の神ですから、食物を司る神ともいえます。苗を供えて豊作を祈願するのもごく自然といえましょう。

畑の神は、一般に地の神様といわれます。社日に鍬をいじると地の神の頭を傷つけるとか、地神講で当たった鍬を使うと豊作になるといいます。

以上のことから年神、荒神、地神は作神としてお百姓さんの拠り所にされた代表的な神といっ良いでしょう。この他には、去来伝承を伴うエビス神にも作神の要素がいくらかあり、雨乞いの神としてはもとより農耕全般の神として崇められた大山、オールマイティー

な神である大神宮と氏神も当然いつも見守ってくれているはずで



ケズリカケ



荒神さんに供えられたウエアゲの苗

夏期特別展「農家の四季」のみどころ

特別展示室入口手前の廊下に、3枚のカラー地図が貼られています。地図は、畑や田んぼ、桑畑、果樹、山林ごとに色分けされた土地利用図です。明治40年頃、昭和12年頃、そして現在（平成元年）の3枚の地形図を見比べることにより、土地利用の変遷および、地域ごとの特色をつかむことができます。明治後期の土沢地区では谷のかなり奥まで谷戸田が作られ、さらにその奥は畑になっていたことがわかります。また、相模川沿いには桑畑がまとまって分布していました。こうした古地形図を携えて、現地を訪ねてみると、個々の土地に刻まれた時間の流れをたどったり、土地利用が地形などの立地条件によって定められていたことをつかむことができるでしょう。

展示室は、春から冬へ、季節の流れに沿って配列されています。春は、「田うない」「牛馬耕」「苗代」「サクイレ」の4コーナーから構成されます。三角コーナーには、実物大の牛と人間を作り、牛にスキを引かせて田をすいている場面を展示しました。首木や鞍やスキの装着法、それに手綱の操作法を具体的に知ることができます。続いて、サクイレといって、かつて麦畑の間に作物を仕付けるときに用いたオンガと呼ばれる鎌を4本展示しました。オンガは、このあたりに特徴的な農具で、神奈川県では主に中南部から南西部の畑地で使用されました。

夏は「クルリブチ」「田植え」「マンガアライ」「夏の行事」から構成されます。クルリは、麦をはじめ、稲、アワ、ソバ、大豆などの脱穀に用いた道具で、クルリの回転する様子を壁に展示しました。麦刈りが済んで旧の国府マチの6月21日過ぎになると田植えを開始しました。展示室に1m80cm×90cmの田んぼを作りまし



田仕事のときの野良着（戦前、神田村）

た。このねらいは、手植え時代の苗と苗の間隔や植え方の手順を知ってもらうことにあります。苗を真っ直ぐ植えるために張った縄と縄の間隔をヒト八カといい、1m50cmくらいになります。展示では、ヒト八カを一人が受け持ち、横に6株くらいずつ植えて後退する様子を表しました。田んぼの足跡マークは、植える所が体重で沈まないように足を株間に置いて植えることを示します。田植え後、半月、さらにまたその半月後に田の草取りをしますが、戦後になると除草機を株間のタテヨコに転がして草を取りました。除草機を入れたり、稲刈りのしやすさのためにも苗の列をそろえる必要がありました。

秋は「地神講」「畑うない」「稲刈り」「稲こき」から構成されます。稲刈りではドブツ田や水っ田と呼ばれた湿田の稲刈りをイメージして展示しました。水深い田の土は軟らかく、腰くらいまで水に浸かって稲刈りする田もありました。刈った稲は直接田に置くと泥で汚れてしまうので、刈り台の上に乗せて束ね、これを田舟に積んで運んだり、刈り台を引いて畦まで出し、根元を広げて畦に立てて干しました。

冬は「籾すり」「ケズリカケ」「山の利用」「藁の利用」の4コーナーから成ります。小正月は、マユダマ、アーボなど豊作を祈る行事がいくつかあり、ケズリカケもその一つで、秦野市今泉で作られた様々な形のケズリカケを展示しました。また、「藁の利用」では、中村和枝さんの協力により、ワラゾウリの製造過程を展示することができました。期間中は、ご希望があれば、体験コーナーで実際にゾウリを作ることにもできます。なお、当初「寄贈品コーナー」で実施を予定していた「養蚕展」は、特展示室入口廊下のケースに変更しました。ご了承ください。

講演会のお知らせ

8月10日（日）には、「稲作と畑作の農耕文化」と題し、相模原市立博物館の加藤隆志学芸員による講演会が催されます。今回の展示では、昭和30年代以前の平塚の農業を知ってもらうことを心がけたので、地域による農具の比較をしていません。講演会では、平塚と相模原、稲作と畑作という、両地域の農業の違いを比較し、それぞれの農耕文化についてお話しいただきます。条件の異なる土地と比較することで、平塚市の農業の特徴が浮き彫りにされ、私たちの足下の暮らしを見つめ直すきっかけにできると思います。ぜひご参加ください。

- ・日時：8月10日（日）午後1時30分～3時30分
- ・講師：加藤隆志氏（相模原市立博物館学芸員）
- ・会場：博物館講堂 参加：自由

夏期特別展

「農家の四季」記念講演会開かれる



8月10日の日曜日午後、博物館講堂にて、「稲作と畑作の農耕文化」と題し、相模原市立博物館学芸員の加藤隆志さんによる記念講演会が開かれました。会場には、45人の方が集まり、普段はなかなか耳にすることができない、アカデミックな民俗学の話に熱心に耳を傾けていました。

講演内容は主に三つに分かれ、まず“民俗学における「稲作」と「畑作」”ということで、日本には畑作に基づく独自の文化が存在しており、従来の水田中心史観だけでは日本の文化を正しく理解することはできず、稲作と畑作の文化を複合的にとらえる必要があることを民俗学の研究史をふまえてお話しされました。

次の“相模原市域の農業の特徴～畑作と養蚕～”では、明治前期の相模原市域の耕地面積に占める水田の割合はわずかに5%（ちなみに平塚市はほぼ田畑半々）と、相模原市がいかに畑作卓越地域であるかを地図や統計資料で示された後、相模原の農業の特徴についてお話しされました。平塚と相模原は、ほぼ同じ面積にもかかわらず、近世平塚は54宿村に分かれ、かたや相模原は18村しかありません。近世村の数が少ないのは、畑作農村の特徴で、これは石高制のためではないかという指摘がございました。

最後に、“「稲作」と「畑作」を巡る諸問題”では、平塚市に代表される稲作地域と比べた畑作地域の特徴として相模原市の例を挙げ、山の利用をめぐる慣行が発達しており山番と呼ぶ見張りが立つこと、畑作物は売るために外界の動きを敏感に察知する必要があり稲作より外の世界とのつながりが強いこと、女性は専ら養蚕担当で耕地に出るのは田植えと麦刈りぐらいだったこと、農耕儀礼に乏しいことなどを指摘されました。最後に今後の指針として、栄養価が高いために米は強い求心性を持っており、畑作儀礼を始めとする畑作独自の文化が稲作の中に取り入れられていく過程を歴史的に検証する必要があることを指摘されました。（浜野記）